

踊り字の沿革について

——「々」を中心に——

東 辻 保 和

小稿で考察の対象とするものは、主として疊符「々」の沿革であるが、「々」はあるいは文字から疊符へと転じて行ったのではないかと思われる所に関心を持つ。

「々」が疊符として、ある作品に一貫して用いられた、早い時期の事例に寛永三へ一六二六〇年版『東鑑』(汲古書院刊)が有る。

高倉宮去十五日密々入御三井寺

(卷一、六オ三)

佐々木即高倉

(卷一七、四ウ10)

雖被召放之面々依申救子細

(卷一八、三五ウ10)

の如くである。但し注意深く見れば、第二画の先端が直ちに右折する如くであつて、今日の「々」とは聊か異るところが有る。寛永三年版『東鑑』に所用の「々」は、殆どが右の形である。この点は、寛永元へ一六二四〇年刊の『天台名目類聚鈔』(国立国会図書館所蔵古活字版図録)所収の巻頭写真、寛永二へ一六二五〇年刊の『南浦文集』(同、所収)の刊記写真を見るのに同様の形をしている。寛文頃の写とされる『大慧書抄』(松ヶ岡文庫蔵)も概ね同様である。

他方『東鑑』には、数は少ないが、

度々忘身(命)

(卷一七、四ウ8)

踊り字の沿革について

稿者の遇目したところでは、々々の最も早く見出されたのは、観智院本類聚名義抄である。例え(6)ば、

祖 上直 父多 トホシ ヌリ カスラフ 祖 上直 父多 トホシ ヌリ カスラフ

(法中、一四〇〜一四二)

における「祖々組々」では、々々は疊符とは考えられず、「祖祖」の音が「祖」の音「但」と同じであることを示すものと判断される。このにつ々いて、沼本克明博士の教示によれば、**僉僉** 上直下正 子オモ (僧中、一)の省文であろうと言われる。同書の凡例の具体例には拳がついていないが、準じて考えることが出来よう。

別別削 谷と心 補徹 ヌリ 恭、書、明、

(僧上、九二)

の場合、第二字目も俗字であることを々々が示していると考えられる。この場合、々々は僉とも読めるであろうが、「谷」の疊符と見られないこともない。同様の事例は、

凶凶咄咄 谷と或心 上插 簪、小春、

(僧下、七二)

聳聳聳聳 谷と心 衝道 成又 礪數者

(僧下、四三)

にも見られる。

しかしながら、

五 五 上直 父多 五 五 上直 父多 五 五 上直 父多

五 (法中、一三)

繫 直 上直 父多

繫 直 上直 父多

繫 直 上直 父多 (法中、一二)

五 (法中、一三三) 緹 直 上直 父多 緹 直 上直 父多 緹 直 上直 父多

緹 (法中、一二七)

緹 直 上直 父多

緹 直 上直 父多

緹 (法中、一三三) 繇 直 上直 父多

えられず、「同じ」を意味する文字と見るのが妥当であろう。

ただ字形については、

標 各 アラハスフ 上直 父多

(佛下本、五〇)

標 正婦或上標 標々

沆 朝朝 沆々

浼 香所 浼々

浼 香所 浼々

澹 上居池 澹々

澹 女或 澹々

澹 澹澹水 澹々

澹 澹澹水 澹々

の如き、室町期に踊り字として用いられた形が早くも現れていることに、関心が持たれるのである。

種々ノ殺生ヲコノム (酬恩庵本『自戒集』(複製)二オ4、寛正二(一四六一)年六月)

長祿二年三月廿三日ヨリ発病々相常ノ病氣ニハアラス (同、三オ9)

諸方ノ人々ニモノカタリス (同、三ウ1)

可懼々々云々 (同、五オ10)

在々處々ニテムラノ皮ノムクルホトノルヘシト (同、二一オ13)

眉鬚漸々ニ墮落ス (同、二五オ2)

正宗文庫本『節用集』(複製)は、山田忠雄氏によつて、「室町期に属する写本であることは間違いない、最も、最末期ではなく、かなり遡るものではないかとみとめられる。」と鑑定されたものという。(同書解題) これには、

過々 (二一ウ) 睥々 (二六ウ)

(佛下本、五一)

(法上、八)

(法上、一〇)

(法上、一一)

(法上、一二)

(法上、一三)

(法上、一四)

擬^{ダク}々^{クシ} (三九オ) 巨^{アサナ}々^ク (四五オ一)

烏兔^{ウツ}々^{クシ} 敷^{シク} (三二オ) 努^{ヌメ}々^ク (五二オ)

の如き、二字分を一個の踊字で済す例も見られる。

文明本『節用集』(影印、中田祝夫著)にも次の事例が有る。

悠^{ユウ}々^ク (八六九?) 努^{ヌメ}々^ク (同) 郁^{ユク}々^ク (同)

万葉集神宮文庫本(天文一五年頃の成立か) 八〇〇番・八一五番歌に々^⑧が用いられていることを犬飼隆氏の論文にて知る。

他方、一三、一四世紀には次の如き踊り字も用いられていた。

方士ヲシテ年^{トシ}々^ク 葉^{クサ}ヲ取^クニツカハスナリ海^{カイ}漫^{マン}々^ク タリ風^{カゼ}浩^{コウ}々^ク タリ(光長寺本『宝物集』^⑨〈影印〉巻一、二六オ7、弘

安一〇へ二二八七)二月)

願以此書写功生々値三寶世々弘通正法一切衆生照闇(興正菩薩觀尊坐像、像内納入品、弘安三へ二二八〇)年九月三日未

時書写畢、『西大寺展』図録に拠る)

當寺本願稱徳天皇 奉始神武天皇代々陛下聖靈(同図録)

面々^{オモシロシ}の意趣(善信聖人親鸞伝絵第二卷信行両座、永仁三へ二二九五)年、『高田本山専修寺展』図録)

時々^{トキトキ}うか々^クいたてまつる(同第四卷山伏済度)

末流處々^{スエリウジヨ}に遍布して(同第五卷廟堂創立)

子細先く言上事舊畢」然而乍受嫡々相承之法流(僧隆舜申状草案、建武四へ三三七)年書と推定される。佐藤進一著『古

文書学入門』(図版1)

このような踊り字は、観智院本類聚名義抄にも認められるのであって、一例を掲げておく。

踊り字の沿革について

品侃上卷下五 詩體也 嘉亨ノ御立、笑く 音者之

抄杖敷ス

洋ヤウ トク

鐙ナギサ

(佛上、二)

(佛上、一四)

(法上、一一)

(僧上、一二七)

康永元へ一三四一ノ年刊五山版大字本『夢中間答集』⁽¹⁰⁾ (影印)には、別に、

其面人連人ニ (一一七頁4)

昭人靈人タル處 (三三五頁7)

天台法花宗ノ相承師人ノ血脈 (四三六頁1)

が見え、この形は康永三へ一三四四ノ年一〇月の醍醐三寶院本『遊仙窟』⁽¹¹⁾、文和二へ一三五三ノ年九月廿四日写の真福寺

本『遊仙窟』⁽¹²⁾、至徳元へ一三八四ノ年七月二日の三浦家文書「平子重房紛失状」(佐藤『古文書学入門』⁽⁴⁾ 図版4)等に見られ、

中でも長享元へ一四八七ノ年法隆寺尊英写『太子伝玉林抄』⁽¹³⁾には頻用されている。ただ、同じく『遊仙窟』古点本であ

りながらも、嘉慶三へ一三八九ノ年円賀写、俊寛貞和五へ一三四九ノ年写移点本(陽明叢書『中世国語資料』)には、く

くはあるが、人は見当らないこと、又これらには人は全く見かけないことに注意しておきたい。

上述の次第で、七の踊り字は管見の限りでは『自戒集』あるいは正宗文庫本『節用集』に初めて見掛けることになる。

次いで、一六世紀に入ると、七はごく普通に目に触れることになる。以下、遇目の資料名のみを掲げる。

○『六物図抄』(永正五へ一五〇八ノ年写、『向日庵抄物集』所収)

○『漢書列伝抄』(但し、清原宣賢自筆分を除く。後述。大永三、四へ一五三三―一五四ノ年頃写。『続抄物資料集成』所収)

○岡田希雄旧蔵『節用集』(影印。国会図書館蔵、大永・天文を降らない。全篇に七、一〇一個)

○『和漢朗詠集私注』（天文頃写。山内潤三・木村晟・枳尾武編）

○『人天眼目抄』（松ヶ岡文庫蔵、天文五（一五三六）年写）

○『下学集』（天文二三（一五五四）年本、東大國語研究室資料叢書）

○『無門関抄』（松ヶ岡文庫蔵、天文永祿の間の書写か）

○『玉塵抄』（影印。国会図書館本、永祿六（一五六三）年）

○『下学集』（室町末写、陽明叢書『中世国語資料』）

○『燈前夜話』（天正七（一五七九）年以前写か。『向日庵抄物集』所収）

一六世紀後半になると、**々**と共に、その変容の過程を見せる例が目に入ってくる。

『日本書紀桃源抄』（清原業賢写、『続抄物資料集成第九卷』）には、

火ノ次ハ土・々次ハ金・々ノ次水ソ（上五一オ15）

と併せて

日々ニ死ト神ノ道ニハ（上五一オ12）

日々ニ生レ・日々ニ死ト（上五一オ12）

の形が見える。

『運歩色葉集』（元龜二（一五七二）年京大本）には、その他にも様々な踊り字が用いられている。

茫々（一11ウ6）
嗷々（一45ウ8）

猷々（一52ウ7）
巨々等（一53オ5）

条々（一58オ3）

品々（一31オ1）

踊り字の沿革について

『碧巖錄抄』(天正二(一五七四)年写、松ヶ岡文庫蔵)

深々密々(卷二、一四九頁2)

洒々落々タラシムル也(卷九、七一七頁7)

『截香記』(天正二(一五七四)年、『東大寺展』資料集)

上生院ニ各々へ一献アリ(一五〇頁六三番)

『長恨歌琵琶行和解』(天正五(一五七七)年、内閣文庫蔵、国田百合子解説・校異)

悠々生死 悠々ハ悲ム言ソ(二〇八一)

凄々不似似向(前声) 凄々ハサマシク引心也(二三六12)

嘈々切々 或ハ嘈々ト大ニサリトキ或ハ切々ト細ク静ニヒク(二二六2)

大絃ハ嘈々 如急雨(小絃ハ切々 如私語)(二二五11)

『碧巖錄集抄四』(天正二三(一五八五)年、『向日庵抄物集』所収)

斑々一テ、言ロハ・斑々モ・駁々モ・法身ヂヤ・亦物々・皆法身ヂヤ・若シ斑々駁々ナラバ・是レ

計テゾ(三三ウ6〜8)

『詩学大成抄』(室町末転写、米沢図書館蔵、柳田征司編影印)

甲々々トツケテ云ハ・チヨツチヨツトラエ出タ心ソ(二、五オ8〜10)

下句ノ末々ハ末末ナリ武帝ノシツク末々トヲナツタソ 叱々ハメス声ソ シツクノ声ワセナリ七ヲ

タ、ウテアルハ七々ナリ四十九ナリ末々ハナツメノ聚ノ字ヲ末末トモカクソナツメラ末々ト云ソ末々

トコ、エ来レトアルソ(二、五ウ2〜10)

『周易抄』(室町末写、土井忠生所蔵、鈴木博編影印)

△竹香春月△藕碧雪年△(87ウ8)

月△花ト云ハ長春ノ花ノ夏ソ(87ウ9)

以上見て来た如く、様々な踊り字が用いられた中であつて、人は比較的限られた範囲に用いられ、早く消えたようである。例えば、上に掲げた『太子伝玉林抄』は人が用いられたのであるが、その内、尊英本の欠けているところを文化八へ一八一へ年親廣が西園院文庫本を写して補つた卷一六には、人は全く用いられず、

法名ハ智顛々ハ静也(下一四)

牙舍利眼舍利等種々在之(下一八)

の如くになっているのである。

遇目の資料に基づいての観察であるから、誤つた判断も少くないことであろうが、調査の間に興味をそされたのは、踊り字の如き臨時的性格の符号であつても、むしろそれ故にか、書記者の使い癖とでも言えるものが窺えたことである。々が広く行われた中であつて、清原宣賢自筆本には々が見え、すべて「々」を用いているようである。

○京大図書館蔵『漢書列伝抄』(『統抄物資料集成第四卷』に拠る)には、

〔第一冊〕

發々ツルハ 叱々ト云(七三ウ4.6)

日々ニ(七四オ10)

肅々(七六オ3)

彌々 岌々(七六オ7)

様々(七六ウ2)

〔第二冊〕

言人コトトクコトナリ々々 (三ウ14)

往々ウツクニ数人偶語ウツクコス (四ウ11)

時々トキトキニ (四ウ3)

第二冊は、八丁表三行以降は業賢の書写と言われている。その部分には次の如く々が用いられている。

然シカレトモ 臣期キ々知シルノナルコトヲニー (八オ3)

其職々カ坐ニアハウソ其々カツミニアハウソ (二二オ2)

月々二千トテ (二四ウ14)

我し、ノ約ヲ持テイルホトニ (二二オ8)

〔第四冊〕

師古曰・巨誦曰詎・々猶豈也 (八ウ13)

出自帝堯・々々云孫生而有文在手 (一六オ3)

生明・々生遠・々生陽・々沛生仁號・々々生端 (一六オ5)

転至陳平・々々笑曰 (二五ウ7)

〔第五冊〕

皆美良也・俗々猶言奕々也 (一オ13)

八々六十四人、六々三十六、四々十六人、二々四人 (二七オ2)

省トハ・少々ハ国ウツクヘ下サル、ソ (二二オ17)

建元々年 (二五オ9)

踊り字の沿革について

累ト下ト垂ル (三三〇14)

〔第六冊〕

是為宣帝・々々本名病己 (二〇8)

改元曰本始・々々四年次ノ年ハ・地節元年也 (二一ウ6)

皆屬莽・々々以太后詔 (二二オ9)

戦ス未レ能ス奉ス稱ス (三三ウ13)

等とある。

○京大図書館蔵『六韜秘抄』(鈴木博氏の写真に拠る)

故・曰ニ呂尚一・々々蓋嘗窮困年老ヲ (卷一、二16)

嗚呼・曼マ・綿メ・其聚メ 必散嘿ホク・々々其光ヒカリ・必遠シ (同九オ)

消ク・不レ塞ガ・將ナラシ・為ニ江一・河一・熒ケイタル・々々不レ救ス・炎ス・々々奈何再葉不レ去ステ・將用ニ斧一・柯一・熒々ハ火ノ光也、火ノチロくトモエ出

ル処ヲ救イ止メスンハ・後ニ炎々ト大ナル火ニナルヘシ (同二七ウ〜二八オ)

猶ニ天一之有ニ北斗一・々々為ニ天一之唯舌云 (卷四、一〇ウ)

○京大図書館蔵『長恨歌并琵琶行秘』(国田百合子解説、武蔵野書院刊)

聖アサマク・主朝ユフマク・々々暮ノ・情コ (一六三4)

遅タル・鐘タル・鼓初ハシメナカキ・長ハシメナカキ・夜ハシメナカキ (一七三1)

耿タル・々々星河欲スルアケナン・曙スルアケナン・天 (一七三5)

○京大図書館蔵『塵芥』(京大言語学国文学研究室編)

忌イミクシク・敷シク (上6オ) 穆ホクク (上22ウ)

百々 (上 32 オ) 廉々 河海 (上 60 ウ)

時々 (上 65 オ) 都々 鳥 (上 83 オ)

不俗々 病病 (下 18 オ) 事々 易々 忘 (下 27 ウ)

楽々 長実 (下 42 ウ) 努々 (下 59 オ)

普波々々 鳥云也 又云 命々 鳥 (下 51 ウ)

似我々々 即成 蜂也 類我々々 云 (下 70 ウ)

種々 (下 73 ウ) 濟々 漸々 (下 99)

十六羅漢 寶頭盧尊者 迦那加跋嗟々々 頗羅陀々々 (下 113 ウ)

以上の自筆部分には々は見られないが、別筆に成る「△人名」には、

時々 示々 時人 示々 自不識常持 布袋 (下 115 ウ)

が認められるのである。

観智院本類聚名義抄の々 (僉の省文と見る) を、踊り字々の源と考えることについては、猶調査が必要かと思われるが、曾て橋本進吉博士が踊り字の成立について

古くは「ニ」の字を右によせて小書した。この「ニ」を草体で書いたものから「々」の形が出来、「々」となったもののやうである。

と説かれた。(『文字及び仮名遣の研究』二八九頁) ここで博士は、文字が疊符に転用されたことを認められたのである。これに倣えば、々が疊符に転用されたと考ええることも可能になるであろう。

次に、人については、古く円珍自筆の

使君念々 増福利那 圓智然後普及十方一切含識 (貞元二年二月五日「最澄台州明州公驗写」『三井寺秘宝展』智証大

師一一〇〇年御遠忌」図録に拠る)

有緣此為相別淨土願見千〇万〇千〇重〇大中九〇八五三〇年十一月廿一日青龍寺傳教沙門前長生殿持念大徳法全狀付圓珎千〇万(同右、『青龍寺求法目錄』)

等に源を求めることが出来るように思う。

一七世紀初頭には、「々」が一般化していたことと上述の如くであるが、なおも「々」が用いられていた。若干の事例を掲げよう。

- 彦根藩校旧蔵『平家物語』(寛永三〇一六二六)年版、滋賀大学図書館蔵)
 - 『唐決集刊記』(寛永三〇一六二六)年四月、『国立国会図書館所蔵古活字版図録』所収)
 - 『臨濟録抄』(沢庵自筆、寛永四〇一六二七)年、松ヶ岡文庫蔵)
 - 『中華若木詩抄』(寛永一〇一六三三)年版、出雲朝子蔵福島邦道解説)
 - 『壺囊鈔』(正保三〇一六四六)年版、浜田敦・佐竹昭広共編)
 - 『大淵代抄上』(慶安二〇一六四九)板、駒沢大学国文学研究室編)
 - 宣長校合『土左日記抄』(寛文元〇一六六一)年八月板、和泉書院刊)
 - 『萬葉拾穂抄』(貞享三〇一六八六)年八月廿日板、新典社刊)
- これらには、楷書の「々」が用いられている。又、

○ 京大図書館蔵『五代帝王物語』(寛永八〇一六三二)年平松時庸写、和泉書院刊)には、行草書体とも言えるものが見られるのである。

種々、ノ禄(二九ウ11)

代々、ノ吉例ニ任ス(三〇オ10)

又御方々ヲ始マイラセテ面々ニ引物ヲ參ラセラル(三〇ウ6)

面々ノ心中タトフヘキ方ナシ(三五ウ5)

神代ヨリ代々ノ君ノ目出キ御事トモハ(五オ11)

以上縷々述べたところからは、踊り字に時代による歴然たる変遷の跡を見出すことは難しいようにも思われるが、ここで『天正十八年本節用集』と、『天正十八年本類』とされる『早大本節用集』(16) (杉本つとむ編著、江戸初期〜中期写かとされる)とを、踊り字に限って比較してみよう。

〈天正十八年本〉

斗、(上一三ウ7)

段々(上一六ウ8)

時々(上一七ウ6)

軽々敷(上一六ウ4)

滑々鳥(上一四五オ4)

漸々(下一二オ9)

凝々(下一六ウ8)

組ニ猷々(下一二ウ7)

且々(下一六ウ9)

阿羅天アラタウト 佛フラクウツト々々(下一八ウ3)

様々又作種々(下一二一オ4)

散々(下一二二オ7)

〈早大本〉

斗々(47―3)

段々(56―2)

時々(90―8)

軽々敷(84―8)

滑々鳥(139―8)

漸々(153―1)

凝々(164―7)

組ニ猷々(179―6)

且々(192―1)

阿羅天アラクウツト 佛フラクウツト々々(197―2)

様々或作種々(206―9)

散々(207―4)

踊り字の沿革について

急く如律令(下二五才4)

急く如律令(216—2)

朦く(下三八ウ2)

朦く(256—8)

濟く多義(下四〇才4)

濟く多義(262—4)

切く(下四〇才5)

切く(262—5)

(既掲の事例と已むなく重複した所がある。)

このように比べてみると、天正十八年本が上冊下冊で踊り字が異なるのに対して、早大本では概ね一貫して同じものが用いられている等の点にすぐ目が付くが、それはともかくとして、早大本の踊り字が現代のそれに一致するのに対して、天正十八年本の踊り字は一致しないところに注目すべきであろう。即ち、そのところに両本の時代による差を知ることが出来るであろう。今回はこれにて一先ず筆を擱く。

注

- (1) 機能を主とする場合に「疊符」を、符号の形を主とする場合には「踊り字」を用いた。
- (2) 『松ヶ岡文庫所蔵禪籍抄物集』(岩波書店刊)に拠る。
- (3) 『慶長十年古活字本沙石集総索引—影印篇』
- (4) 寿岳童子編、清文堂刊
- (5) 『句双紙抄総索引』清文堂
- (6) 正宗敦夫編に拠った。
- (7) ノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会編
- (8) 「可々良波志」の「々」(萬葉、第百二号、昭和五四・一二)
- (9) 小泉 弘編『古鈔本寶物集』(角川書店刊)に拠る。
- (10) 『五山版夢中間答集付谷響集』(勉誠社刊)
- (11) 古典保存会複製
- (12) 貴重古典籍刊行会複製

(13) 法隆寺編、吉川弘文館刊

(14) 『詩学大成抄の国語学的研究影印篇』清文堂

(15) 『周易抄の国語学的研究影印篇』清文堂

(16) 山田忠雄『節用集天正十八年本類の研究』に拠る。

(補)

中国文献に現れた疊符について、井波陵一氏（京大人文研）から次の如く示教をいただいた。厚く感謝の意を表する。

○唐宋諸賢絶妙詞選卷之一

〔李太白〕

菩薩蠻 二詞為百代詞曲之祖

平林漠漠煙如織寒山一帶傷心碧暝色入高樓有

人樓上愁○玉梯空佇立宿鳥歸飛急何處是歸程

長亭連短亭

憶秦娥

簫聲咽秦娥夢斷秦樓月秦樓月○柳色霸陵傷

別○樂遊原上清秋節咸陽古道音塵絕音塵絕西

風殘照漢家陵闕

〔白楽天〕

〔詞選序〕に淳祐己酉（一一二四九）年とある。（上海商務印書館縮印明翻宋刊本）

○朝野新聲太平樂府卷之一

〔鸚鵡曲〕

馮海粟

踊り字の沿革について

傍線部に疊符。

長相思 一詞非後世作者所及

深畫眉淺畫眉
蟬鬢鬢華雲滿衣
陽臺行雨迴
○巫山高巫山低
暮雨瀟瀟
○郎不歸空房獨守時

長相思

汴水流泗水流
○到瓜州古渡頭
吳山點點愁
○思悠悠恨悠悠
○恨到歸時方始休
月明人倚樓

呂濟民和韻

差我峯頂移家住是箇不啻猶然父懶柯時對老無
花癡之扶風雨困故人曾喚我涼來知道不如休去指門前
萬壁雲山是不費青錢買廬

利鎖名韉定沒箇身心穩處
○年牛背扶犁住
近日
最快惱殺衰父猶苗肥
恰待抽花渴然青天雷雨

去甚河橋柳樹全疎恨正在長亭短處
○只在芭蕉
○斷送別
○為人
○茅店
○諸葛

烟剝雨 縱新 價紙臨墓樂事賞心俱去永和年小草斜
行到野鴉家鷓鴣處

年時雪斷溪橋脫度前
○濟歸去買臣妻富貴
○仍氣
○縱到寒
○舞
○潭河西北征鞍住
○古道上不見
○畹父白茫
○細

草平沙日日金蓮川雨
○李陵臺
○往事休
○萬里漢長城去
趁燕南落葉
○歸來怕
○迤迤
○飛
○孤
○冷
○處

花廳新斷留
○像佳滿酌酒
○勤撥
○鞍父柳青
○萬里初程
○點
○深
○陽
關朝頭

(上海商務印書館縮印烏程蔣氏密韻樓藏元刊本)

曾山人 心猿意馬竊難住舉酒豪記送別那梁父想人生碌碌紛々幾度落紅飛雨

○增修箋註妙選群英草堂詩餘前集卷上

燭影搖紅 王晉進

西平樂 周美成

螺子黛風流天賦與精神五斜全在嬌波轉古切野
秋波日也早是繁心可慣高莽綵歌日更那堪頰秋波
頰勝幾回得見暮繁心曲了還休爭如不見

(上海商務印書館縮印杭州葉氏藏明本)

爭知向此狂途區々佇立塵埃追念朱顏翠髮曾到處故人嗟

○玉臺新詠集卷一

古樂府詩六首

相逢狹路間 與樂府極異為

(上海商務印書館縮印無錫孫氏藏明活字本)

(參考文獻)

趙翼『陔餘叢考』卷二二、重字二点

踊り字の沿革について

堂上置樽酒使作那那娼中庭生桂樹華燭
何煌く兄弟兩三人中子爲侍郎五日一來遊道
上自生光黃金絡馬頭觀者滿路傍入門時左顧
但見雙鶯鶯々々七十二羅列自成行音聲

中田祝夫『古点本の国語学的研究総論篇』六〇六頁

小林芳規「踊字の沿革續貂」(広島大学文学部紀要(日本・東洋)第二七卷一号、一九六七年十二月)

小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』(広島大学文学部紀要第三〇卷、一九七一年三月) 四六頁以降

小林芳規「日本語の歴史」(『新・日本語講座4』一九五頁以降)

東辻保和「熊野市尾川区有、高梨家旧藏御成敗式目について」(三重の古文化67、一九九二年三月)

(付記)

稿を成すに当り、大塚光信氏、鈴木 博氏、沼本克明博士の示教を仰ぎました。就中、大塚光信氏より多大の学恩を忝うしました。厚く感謝の意を表します。